



嬉泉の新聞 第63号 2007年(平成19年)11月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

http://www.kisenfukushi.com E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫

編集人=友田 篤

年金問題に思う

袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園オンブズマン 山田 美和子

最近、退職後本業を活かしたボランティア活動を行う人が多くなった。

私の友人・知人にも、子育て支援や傾聴、手話、食事サービスなどの活動を行っている人が多い。私も退職して久しいが、新たに発足した「オンブズマン」やNPO団体への協力、地域の助け合い活動の仲間入りなど、ささやかな活動で今日を迎えている。

内閣府が毎年選考している「エイジレス・ライフ」の実践者を見ても、高齢期を社会のために役立てたい、社会への恩返しをしたいと活動なさる方が増えていることを実感する。

これらは、生活の基盤として年金があるということではないかと思う。最近の年金にからむ諸問題を見聞きするにつけ、高齢期の生き方に年金の存在がいかに大切であるかということを現在の高齢者の生き方からも主張したいと思う。

保育や福祉の分野には、戦後、給与の保障もない貧しい時代から独身のまま働いてきた人たちが多く、退職後、なんとか年金で生活できているようである。

ある人は「標準的な年金額には満たないが、切り詰めてようやく生活できる」といい、ある人は、「納得できる仕事をしたいと夢中で取り組んできたが、年金で生活できるなんて夢をみているよう」と現在の生活に感謝しながら、ご本人が現役時代改築した園舎の借金返済やNPOへの支援など、限られた年金から寄付をするなど、けっして豊ではない、まさに清貧の生活を

営んでいる。

それでも、これは長年の関係者の運動があった今日の姿であり、これからも、年金制度によってささやかでも老後が暮らせる社会を失うことがないようにと、後輩たちの今後を案じている。

ここ数年、社会福祉構造改革がすすめられ、苦情相談やサービス評価、虐待防止など、利用者の権利擁護は一步前進したが、他方で経営の効率化は働く人々へのしわ寄せが大きい。費用の大半が人件費であるため、経費節減では人件費を削ることになり、パート職員の増加、長年働いてきた人たちのリストラなどが行われている。そして、志を持ってこの仕事を選んだ人も、将来への不安があると退職する例も少なくない。

人が人を支えるこの仕事は、人が財産である。人を支える人たちが不安定のままでは、安定した人との関わりが困難であろう。志をもって福祉の仕事を選んだ人たちが、安心して働き続け、人との関わりという仕事の充足感が得られ、そして、老後も年金で人並みの生活が営まれるようであって欲しい。先輩たちが歩み続けた戦後からの時代とは異なり、いまや保育も介護もその他の福祉分野も、社会から求められ、人々の生活にとっては欠くことができない仕事となっている。それだけに応援者も増えている。先輩の歩みに学びながら、関係者一丸となってこの危機を乗り越えられることを切に願っている。

社会福祉援助論

石井 哲夫

— その26 —

社会福祉最前線からの訴え その二

〈家族支援の難しさ〉

厳しい父親から暴力をふるわれて育ったNさんは、高校生の時に教師に可愛がられて、大学卒業後その教師と結婚して、自閉症の一子をもうけた。育児に苦勞しながらも幸せに暮らしていたが、それもつかの間で離婚し、母子家庭となってしまう、高齢化した親の元に身を寄せていた。親は高齢化したもののまだ元気で、祖母が中心となって孫の世話を引き受けてくれているので、Nさんも働きに出ることが出来ている。そのNさんがある時(数年前に)相談に来た。「祖父が我が子に暴力をふ

るい祖母がそれを止められなくなっている。中学二年になった我が子は学校で友達もなく教師にも頼れず、登校拒否しているが、体力があり、この頃は祖父を突き飛ばすようになっている。どうにかならないか。」というものであった。離婚した夫は、病気になる入院生活を送り、子どもを預けることも出来ないという。当然所管の行政に相談をしたかどうか聞いたところ、かつて児童相談所を紹介された。しかし、そこでも対応しきれず、ある精神科医に回された。そこで高機能自閉症と診断され、施設入所をすすめられた。

だが、我が子が安住できる受け入れ先を探す、施設政策が後退している現状では、本人も行きたくないし、高機能の人を積極的に受け入れてくれる施設が無いとNさんは言う。過敏で文句ばかり言う高機能の青年期に入る子どもにも対応してくれる機関がないと言っ

この事例は、自閉症に関わる家族の悲惨さを示すものである。Nさんに関しては、学校と連絡してその教師と連絡を取り合って、ある有料の相談機関にかかることができ、また、そこで相談を継続してきて、我が子が学校に復学可能となってきた。だが、この人たちはある程度財産があり、親族がある人たちだからこそ、持ちこたえることが出来たものであり、誰でもすぐに相談機関にたどりつけられるものではない。今や多様

な支援機関が求められる多問題家族が激増している状況を、そのまま放置できない緊迫性を感じさせられている。

私が行っている家族支援は、現状の社会資源へ結びつけることであるが、今のような社会福祉の移行期においては、嘗ての資源が衰退して、消極的であり、新しい地域支援は手一杯で、得にならない困難な家族支援を引き受けてくれる機関がない状況である。家族を基盤として地域支援を考えるという現政策は、非現実的でその発想は貧弱極まりない。はるか将来に向けて可能にしたい政策とは思いますが、その間の犠牲者は膨大なものとなる。家族支援を行う社会連帯を進める政策を優先させたい。それまで現支援資源の家族支援のために連帯を進める政策立案を緊急に求めたい。



「私の仕事」

武智 俊典

福祉活動センターよろこびでは「児童デイサービスよろこび」と「きせんの在宅支援事業」を行っています。平成17年度にスタートしてから3年目を迎えました。

ここでは、その取り組みについて紹介したいと思います。

「児童デイサービスよろこび」は、幼児教育や学校教育に困難な状態があるお子さんを対象に、子どもの生活研究所内で一定時間お預かりし、お子さんに必要なプログラムを提供しています。平成19年6月現在の登録者数は、35名ののぼり、毎月少しずつ増え続けています。水曜日を除く平日の14時30分から17時30分まで、小学生以下のお子さんを対象としており、

就学前のお子さんが7割近くを占めています。曜日を決めて利用されている方、ご家族の方のご用事に合わせて利用する方など利用の仕方は様々です。一日あたり6～10名の利用があり、コンスタントに利用される方が増えてきています。児童デイサービスよろこびが貴重な地域資源の一つとして機能していることを感じています。

「きせんの在宅支援事業」は現在8名の方の利用があります。きせんの在宅支援事業では、送迎支援、余暇支援、生活全般にかかわる訪問支援といったサービスを提供しています。送迎支援では、ご本人が多動であったり、突発的に大きな声をあげてしまったりといった行動上の難しさがあるような場合やご家族のご病気等、何らかの理由でご家族だけで学校や通所施設等へ送り迎えることが難しいような場合に、支援員が代わって送迎を行っています。余暇支援では、ご本人の興味・関心を考慮しながら支援内容を検討し、支援員と一緒に動物園や水族館に出かけたりプールに行ったりしています。生活全般にかかわる訪問支援では、家族が家を留守にしている間お子さんと一緒に留守番する、病院や歯医者への通院に付き添う、不登校のお子さんへの訪問支援などといったことを行っています。

設等へ送り迎えることが難しいような場合に、支援員が代わって送迎を行っています。余暇支援では、ご本人の興味・関心を考慮しながら支援内容を検討し、支援員と一緒に動物園や水族館に出かけたりプールに行ったりしています。生活全般にかかわる訪問支援では、家族が家を留守にしている間お子さんと一緒に留守番する、病院や歯医者への通院に付き添う、不登校のお子さんへの訪問支援などといったことを行っています。

現在最も多い依頼の内容は送迎支援です。ショートステイを利用するためにのびろ学園へ送迎したり、アスベの会に参加するためにアスベの会への送迎と参加中の支援をしたり、のびろ学園の週末帰宅時の送迎に加えて帰宅中の家庭生活の支援を行ったりするケースもあります。このように他の事業所や関係諸機関を利用することでご本人の活動の幅が広がり、ご家庭での安定した生活を送ることができます。今後関係諸機関との積極的な連携を図りながら支援を進めていきたいと考えています。

また、送迎支援や余暇支援においては、公共の交通機関や施設を利用することになります。その中では、当然「社会」を意識しながらかわることになります。施設の中で許されることであっても、社会の中でそのまま通用するとは限りません。いかにご本人の気持ちをしつかりと汲み取りながら、社会との折り合いをつけていくか。そこに難しさがあります。しかし、地域や社会の中でご本人と活動したり支援したりすることは、社会の中に理解者を増やし、ご本人と社会との距離を縮める機会でもあります。私たち支援員には、ご本人と社会との橋渡し役としての役割が求められています。柔軟な思考と対応が求められますが、一つ一つ丁寧にかかわっていく中で、明るく活き活きと活動するご本人の姿、また支援員の態度を見せることがその第一歩となるのではないかと感じています。

(こぐま学園 職員)

私たちの じぶんと 赤塚からの発信

赤塚福祉園における防災活動

三輪 謙

今日では障害者福祉施設でもリスクマネジメントへの取り組みが求められています。赤塚福祉園では消防計画を基本にして体制を整えるとともに、各種のマニュアルを蓄積しつつ防災意識の涵養を図っています。今回は防災活動を通して赤塚福祉園の姿を報告します。

防災拠点としての赤塚福祉園

赤塚福祉園は市街地の中に位置し、二、八〇〇平方メートルの床面積をもつ建物と周囲には緑地があります。ここは板橋区の防災計画では大規模災害の際には高齢者、障害者など災害弱者を約二五七名収容することになっているのです。その際、ライフラインとして電力と水の確保が必要ですが、地下機械室には非常用大型発電機が備えられており、停電すると自動的に

起動して二百ボルト、百五十キロワット、すなわち一般家庭四、五十戸分の電力を供給することになります。この電力を使って貯水槽から十六トンの飲料水を供給します。さらに、三角公園地下の防火用水槽には四十トンの水が貯えられています。板橋区営の施設として近隣からも注目され、下記のような防災活動を実施しています。

地域と連携した訓練

板橋区では夏の終わりの休日に区内一斉に町会連合会ことこの地域総合防災訓練が実施されます。下赤塚地区でも近隣の十二の町会から千人近くの参加者が参集して大規模な訓練となります。事前に消防、消防団、警察、区地域センター、学校、福祉園による打合せを行います。当日は園をあげて参加します。訓練実施会場である近くの小学校の校庭では特に福祉園利用者のために、待機場所として専用テント

や体育館も使えるよう配慮されたり、初期消火訓練では福祉園利用者に参加しやすいよう協力してもらっています。

また、年度末には夜間想定のご総合訓練を行います。緊急保護事業の赤塚ホーム（定員8名）で利用者が宿泊中に夜間に発災したとの想定で訓練を実施します。このときは町会から防災委員、消防団、女性消防隊が参加し、消防署の全面的な協力により、宿泊中の利用者を職員と協力して避難させる、続いて模擬消火器による放射訓練、通報セットでの電話通報体験などが行なわれます。これらの訓練について消防官からは「篠ヶ谷戸町会との『災害活動相互応援協定』が実質的に生かされており、施設と地元の関係が円滑な貴重な例」と感想を伝えられました。

さらに毎年秋季には保護者の参加協力により引継ぎ訓練を行ないます。更生施設在園者五十八人の多くの保護者が参加し、授産施設も熱心な参加があります。引き続き行なわれる全体保護者会の機会を活用して志村消防署救急隊の協力により保護者むけの救命救急講習を実施したところ、前回は四十名

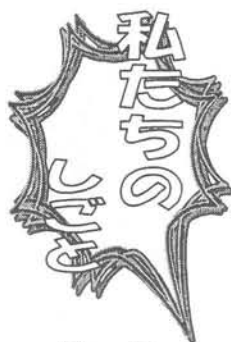
近い積極的参加があり、地域防災活動に協力ができました。

さまざまな不測事態を想定

このほか赤塚では園外活動中に不測の事態がおきたらどうするかを想定した訓練を実施しています。通園バスに乗車中、交通事故にあつた、バスに不審者が無理矢理乗り込んだ、移動中の車内で発病・発作がおきた、さらに地震が発生した、震災の警戒警報が発令されたなどの事態を想定した通報対応訓練をバス運行会社・ドライバーも協力参加して実施しています。このほか、消火栓が稼動したあとの水損防止訓練、給水バルブ閉め動作訓練、消火器の集結訓練などを実施しています。

これらの経験を活かして今後とも一層現実在即した防災対策を実施していききたいものです。その際、地域の理解・協力が前提であることはいうまでもないことです。個々の職員が通勤時を含めて日常の職務において近隣の皆さんと誠実なお付き合いを積み重ねていることが現状につながっていくと考えられます。

（赤塚福祉園防火管理員）



袖ヶ浦からの発信

『食生活の向上を目指し』

小高 由起子

現在、ひかりの学園には、利用者が五十三名在籍しております。厨房では、毎日四名の調理員が二百食を超える食事を作り、学園の利用者、グループホームの方々、短期入所の方々、食事介助に当たる職員に提供しています。食事はただ機械的に空腹を満たし、単に生命を維持していただくではありません。

誰にとっても楽しい場であっていただきたいと、日々努めております。美味しい料理を作るのは勿論のこと、彩りや盛り付け方等、見た目からも楽しめるように工夫し、又、衛生面にも十分に留意して安全で美味しい調理が出来るように努めております。

日本は現代、飽食の時代です。そして、世界一の長寿国になって

います。しかし、平均寿命が延伸する一方で癌、脳卒中などの疾患が死因の大きな割合を占め、高血圧や糖尿病の治療を受けている人の数が増大しています。

さらに、獨木や寝たきり等によって要介護の状態になる人が増加し、又、心の健康といった課題が日常生活の質に大きく関係しています。そこで、私たちが、健康で豊かな食生活を実現出来るように、国は平成十二年に「食生活指針」を策定しました。

現在、ひかりの学園では、エネルギー制限食、減塩食などの特別食を召し上がっている利用者が数名いらっしゃいます。

普通食を召し上がっている方の中にも、肥満傾向の方やメタボリックシンドローム予備軍の方が半数近くいらっしゃるといふ現状にあります。この方々が、近い将来生活習慣病を初めとする様々な疾患

にならないためにも、日々の食生活が如何に大切かを伝えていかなければなりません。

利用者は、園生活の中で食事が一番の楽しみである、という事を念頭におき、利用者の嗜好と栄養面でのバランスとが両立できるようにすることが、今後の大きな課題です。

支援員と連携を図りながら、皆さんのご期待に応えられるよう、そして、健やかで心豊かに生活できるように努めていきたいと考えております。

(袖ヶ浦ひかりの学園栄養士)

「新しい袖ヶ浦ひかりの学園」

高山 牧子

昨年度に完成したこころ棟の廊下と共有スペースは空間が広く、また廊下の形からちょっとした迷路のようです。

どこをどう通れば美味しいオカズを見に行けるのか、あまり人來ない静かなスペースがどこにあるのか、皆さんすっかり心得ており、こころ棟の方々はもちろんのこと、そだて棟の方も時々こころ

棟に足を運んでいます。

また、こころ棟とそだて棟の間に小さな中庭のようなスペースがあります。

利用者の皆さんが生活の中で「ほっ」と一息つけたり、ちょっとした休み時間に楽しめる場所を作りたいと、支援員たちが立ち上がり、そこに花を植えたり遊びの設備を考えたりと、試行錯誤しています。

こころ棟が建ち、生活のスペースが広がった分、ともすると殺風景にも見えてしまう広い空間が、アウトスの絵を飾ったり新しいスペースの活用を考えることで、少しずつ変化してきました。

そこで生活している利用者の成長と共に、生活の場である袖ヶ浦ひかりの学園もある時は形を変え、進化しているようです。

学園と共に利用者も支援員も育ち、少しずつ皆で袖ヶ浦ひかりの学園の歴史を刻んでいるのですね。また何年か後にふと振り返ったとき、いったいどんな「成長と進化」が起こっているか、今から楽しみです。

(袖ヶ浦ひかりの学園支援員)

嬉泉トピックス

ご報告

◆宇奈根なごやか園 開園

自然が残る世田谷区の南の端に宇奈根なごやか園があります。多摩川を渡って吹く風は心地よく、大きく開かれた園舎の窓からは光が降りそそぎ、中に入るとふんだんに使われた檜の木の香りに包まれます。「この建物は何？家ですか」という言葉をよく耳にします。これまでの保育園の概念を変えるような園舎です。

6月の終わり、たくさんの方のお力添えによって落成披露目の会を終えることができました。家庭の雰囲気、大家族のようなつながり、一人ひとりの子どもを大切にという石井所長の保育に寄せる想いを全職員が心に留め、今、宇奈根なごやか園の新しい保育が始まりました。

(宇奈根なごやか園

園長 氷見小夜子)



催し物のご案内

【東京都発達障害者支援センター】

◆発達障害のある人への理解と

支援パート3

「発達障害がある子どもと家族への早期支援」

(講演・ワークショップ)

〈日時〉12月1日(土)

13時～16時30分

〈会場〉東京都庁都議会議事堂

一階都民ホール

〈定員〉200名(要予約)

*お問い合わせ・お申込みは

東京都発達障害者支援センター
〈電話〉03・3426・2318

◆平成18年度 社会福祉法人

嬉泉 寄付者名簿

(敬称略・順不同)

櫛橋武・齋藤穂・工藤鎮子・小原
ナツ子・伊藤和子・土谷新・黒林
美江・浜ノ園利夫・松井吉彌・田
中瑛也・内田利恵・亀本妙子・吉
原貞・湯浅正・下田明彦・福井邦
子・岩崎稔・神山登代子・南サワ
ヨ・野田康生・龜山隆男・秋山信
靖・荒井恒夫・池上嘉信・石原敦
夫・井出正代・伊藤和子・内田利
恵・大久間展樹・大山勝地・片桐
一平・賀戸文彦・木村元正・工藤
邦英・工藤成一・工藤正路・小林
秀一・小林美津江・小山悦夫・島
野恵・菅原収三・鈴木佳子・高田
昇一・竹内昭子・竹原直幸・館靖
子・田村聰達・田村匡・時永康雄
中村三男・新妻主計・天俣彦
納土郁子・野田克子・早瀬進・早
瀬良子・半田久倫・平野鍬保雄・
藤宗良子・澤井映里・藤本勝彦・
藤本真起子・坪子美子・水島翠子

村岡潤子・村岡精一・村田堅一・
村田操・茂木勝衛・森本昇・山岸
陽子・山口潔・山中勝子・湯浅正・
田中圭男・追川喜信・岸本仙松・
春日玉子・山根多一
・千葉県共同募金会袖ヶ浦市文会
のびろ学園父母一同
・東京都福祉保健局
・果鴨ときわ教会・嬉泉後援会
・東京都共同募金会
・東京都善意銀行
・ひかりのと共に歩む会
・篠ヶ谷戸町会 篠崎正一
・タカハシ金型サービス高橋健司
・都営住宅自治会(八部)
・米のたむら
・加賀福祉園
・愛和保育園
・赤塚銀座会 井指止雄
・花みずき
・有限会社サライコーポレーション
・東京都信用組合協会
・めばえ学園保護者一同
・瑞穂工業技術研究所
・東洋英和女学院大学
・朝日管財(株)
・相川醤油株式会社
・ファンタング
・世田谷区医師会
・北沢優申会
(日18年4月～日19年3月)
以上の皆様に厚く御礼申し上げます。
理事長他役員一同

私たちの TOSCAからの発信

東京都発達障害者支援センター

今回は、昨年度一年間を通した本センターの「相談支援」の状況と課題を報告したいと思います。

東京都においては、「発達障害者支援センター」の設置が当センター一ヶ所のみであり、「発達障害」の周知が徐々にすすんできていることから、本センターに寄せられる相談の申し込みおよび問い合わせ件数は、年ごとに増加している状況があります。昨年度は延べ616件の相談支援を実施しました。相談内容は複雑で多様化しており、現在の障害福祉制度においては対応困難な事例が多くなっています。

また、医療、保健、福祉、教育労働をはじめとする関係者間において、啓発および支援者育成のための研修を通して協働する機会を重ねてきていて、相談事例を通して連絡・調整を通じた支援人脈は少しずつ広がってきてはいるものの、地域における支援体制の整備や支援の質の確保については、まだまだ端緒にいたばかりで課題

が多く、今後、区・市単位のレベルで具体的に積極的に進めていく必要を痛感しています。

昨年度の相談内容と支援の困難な内容を特徴的にまとめて以下にご紹介します。

1、相談内容について

①すべてのライフステージに対応しているが、19歳以降の年齢の人の相談が多く、とくにこの一年間で20〜40歳代にかかわる相談が増えている。

②30歳代後半以降の年齢については生活の困難さを訴える相談が増えている。

③思春期以降、反社会的行動を繰り返し、家庭および地域生活が困難で、具体的対応が得られず放置されている事例がある。また、その前段階と考えられる事例が多くなっている。

2、相談支援実施上の困難

①相談ケースの情報把握に時間を要する。

・相談対象者を確定しにくい。
・問題がこじれ複雑化しており、

具体的な対応の出発点に立つまでに時間を要する。

②支援過程を当事者側に理解してもらうことに時間がかかる。

・本人の現況に関する共通認識をもつことが難しい。

・支援連携のための関係機関、関係者との連絡調整に時間がかかる。

3、具体的な内容

①情報提供に関して

「発達障害者支援法」が施行されて二年以上が経過しているが、現段階において「発達障害」に対応できる社会資源は未整備な状態です。そのため、発達障害がある、またはその疑いがあるとする本人や家族などの当事者、あるいは支援関係者、就労している場合は雇用主側、さらには、マスコミ関係など様々な方面から当センターに以下のような問い合わせが入ってきます。

・発達障害に対応可能な医療機関、療育機関。

・高機能の発達障害をもつ子どもへの対応がよい学校、よい自治体。

・年金や障害者手帳の制度、など。

②就労に関して

本人、家族、支援関係者、雇用主などそれぞれの立場から、就労に関わるさまざまな困難状況と具

体的な対応法に関するアドバイスを求める以下のような相談が多くあります。

・学校卒業後の行き場がない。

・就労できない。就職しても長続きしない。

・不安定な就労が続く。

・職場の同僚や上司との人間関係がうまくいかない。

・就労支援担当者とのミスマッチが起きやすく、就労へ向けた困難が解決しない。

③家庭生活に関して

親からわが子に関する以下の内容が圧倒的に多い状況です。

・ひきこもりの対応。

・家族関係の軋轢。

・本人の自分本位の生活の仕方により、家族の生活を圧迫。

・利用できる社会資源や制度がほとんどない。

・親の高齢化による生活の不安定。親亡き後の本人の生活の不安。

以上の状況ですが、このセンターは、センター長及び四名の専任支援員が中心となって事業を行っています。法人としてもこのセンターの存在を重視し、出来るだけ他の事業からも支援するように計らって来ています。

(センター長 石井 哲夫)

ひかりのタイムス

独立第54号

『九州と台わん』

市川 浩志

(平成19年4月20日から4月28日まで、台湾・韓国・九州旅行に行った時の感想を寄せて頂きました。)

今回は台わんに行つて南シナ海を見てかんこくの汶山の山の方まで行つてかんこくから博多へ出て博多から枕崎へ行つて1泊して春日の田舎へ行つて指宿に泊まって海を見て指宿から汽車で横浜へ出て袖ヶ浦に戻ってきた。

台わんは台北に1泊高雄に行つて1日休みをとつて枋寮へ行つた。南シナ海を見て、枋寮は、港もあった。岬もあった。4月にしてはあつかった。海を見た海ベンチで休んだあと海岸ぞいで休んだ。

枋寮の駅はよかった。夜明かしはびっくりと思った。枋寮の

港は見たのは1回目海岸で休んだのがよかった。パイヤジュースを飲んだ。

かんこくはソウルの駅もかわつていた。

汶山まで行つて山の方まで行つた。汶山は町だった。山の方まで行かないと田舎はなかった。汶山はタクシードの方へ行つたら田舎だった。田や畑があった。山の寺へ行つた。小学生がいろいろいた。汶山は山があつたけどほとんどは田や畑だった。ソウルはあつたかかった。

そのあとの九州は枕崎はかわつていた。駅は待合室はなかった。海南荘へとまつてせいかいだった。指宿は千成荘は、たてものがかわつていた。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

(ご本人の了解を得て文章を編集しました。)

『フォートに再復帰したこと』

村岡 敦

ぼくは、この「フォート」に実に約6、7年ぶりに、作業にふつきをした。

その時は、「フォート」の店番とか、産直野菜や、パンや菓子を僕は売ったりしていました。

その時のたん当の多き子さんから、「フォートの仕事してみませんか？」とさわれたので、その時は仕事しました。あの時だと、ボランティアの人や、退職した高石さんや、黒田よし江さんと作業してました。さて、どうして、ぼくが「フォート」の作業をえらんできたかというと、午前の、エコ作業はどうしても、やりたくなかったです。同じく時間するのにも「フォート」の午前なら、作業したかったです。

ぼくとしても菓子の生地作りは、それなりに自信ができました。今、新しう品の、「ケーペゼック」に、チャレンジ、頑張っているところなんです。また、ケーキやクッキーも、いろいろな物を作ってみたいです。

それから、ぼくの作った菓子(たとえば、ケーペゼックやクッ

キー)など、販売でいろいろなお客さんとかにも食べてほしい。また、ぼく個人の考えだけど、ひかりの職員だと、男だと十澤君、胡摩崎君とかに、自分のぼくの作ったの食べてほしい。「のびる学園」だと、鈴木啓功君、仲尾正さんとかに、食べてほしいです。

赤塚の鈴木雅士さんとかに食べてもらえれば、ぼくは嬉しいんです。

ひかりのだと、筒井さん、北島さん、高山牧ちゃんに食べてほしいです。あと、受付の石井恵美さんにもぼくの作った菓子食べてほしいです。

今、ぼくが、「フォート」で作業して考えていることです(終)

(グループホーム利用者)



フォート・菓子部での作業風景